

階

【きざはし】

～社会科教育を考える～

No.52

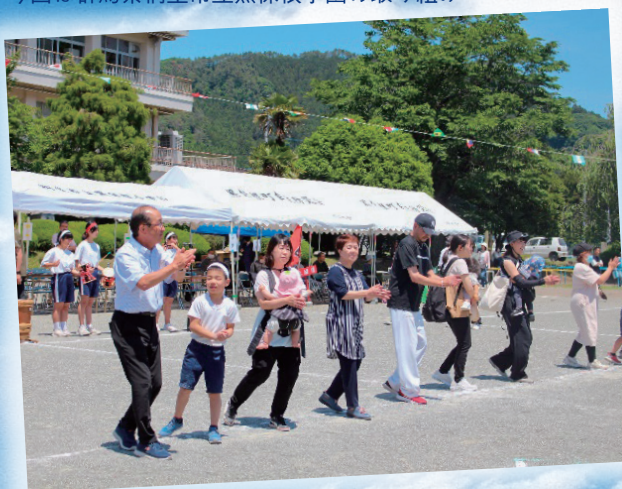
2025年1月



池上彰のインタビュー
今回は サヘル・ローズ さん

- 池上彰のインタビュー⑤②
傷の痛みをわかち合う経験で
生き延びた意味に気づいた 2
サヘル・ローズ 俳優
- わたしの一里塚
育つ環境をつくり、古の技と心を伝える 8
小川 三夫 株式会社 鰯工舎 総棟梁
- ここに教育あり
ふるさとの農業を実践から学ぶ
～小学校農業科の取組～ 10
中野 富全 福島県喜多方市教育委員会 学校教育課 課長補佐・指導主事
- 社会と教育の架け橋
アートが奏でる創造の余白
～芸術士の活動から～ 12
三井 文博 特定非営利活動法人 アーキペラゴ 代表理事
- 異国日本の地に立って
チベットと日本の架け橋を目指して 14
加羊 公益財団法人 守屋留学生交流協会 第43回奨学生
- 子どもと、ともに
「ふるさと黒保根学」を通して
郷土を愛する心と未来を創造する力を育む 裏表紙
群馬県桐生市立黒保根学園
- 資料
宇宙からみた大阪

子どもと、ともに (裏表紙掲載)
今回は群馬県桐生市立黒保根学園の取り組み



合同運動会のフィナーレを飾る黒保根八木節。
地域と学校が一体となる光景は感動的。

帝国書院

池上彰の インタビュー vol.52



傷の痛みをわかち合う経験で 生き延びた意味に気づいた

1985年、イラン・イラク戦争（1980～88年）のさなかに生まれ、4歳のころに孤児となったサヘル・ローズさん。8歳で養母とともに来日してからも、住む家をなくし、いじめにあうなど壮絶な経験をされています。さまざまな状況に置かれる子どもたちのため、学校や先生に対する切なる願いをお話しくださいました。

このインタビューは、2024年7月に収録しました。



撮影 松本のりこ

俳優

Sahel Rosa

サヘル・ローズ

1985年、イラン生まれ。7歳までイランの孤児院で生活し、8歳で養母とともに来日。高校時代にラジオ局のオーディションに合格、芸能活動を始める。ナレーターやコメンテーターのほか、俳優としても活動の幅を広げ、主演映画『冷たい床』（2018年）でミラノ国際映画祭にて最優秀主演女優賞を受賞。2014年には国際人権NGOの活動「すべての子どもに家庭を！」で親善大使も務めた。公私にわたる支援活動が評価され、2020年にアメリカで人権活動家賞を受賞。著書に『これから大人になるアナタに伝えたい10のこと』（童心社）などがある。

世界情勢と自分の人生は切り離せない

池上 ここ近年、世界情勢は目まぐるしく変化しています。一方で、日本の若者たちは世界に対する関心が薄れてしまっているように見えます。サヘルさんはどのようにご覧になっていますか。

サヘル・ローズさん（以下サヘル） 2022年のロシアによるウクライナへの軍事侵攻以降、世界は激しく変化しています。日本では日常の時間が流れていても、現地で暮らす人々には私たちとは違う時間が流れている。そして、この対談記事が読者の皆さんに届くころ、どんな世界が広がっているかは誰にもわかりません（収録は2024年7月）。自分の教訓として先のことはあまり考えないようにしていますが、世界情勢は、自分たちの人生と切り離すことができないと考える毎日です。

池上さんは、大学などで若い世代にどのように世界情勢を伝えていらっしゃるのですか。

池上 いつも学生には、「まるで関係のない遠いところの話のように思えることも、すべてはまわりまわって私たちの生活に影響している」と話をしていきます。例えば、ロシアによるウクライナへの軍事侵攻は、遠いところの話かもしれませんが、しかし、ロシアに対して経済制裁が行われ、石油と天然ガス、小麦の価格が世界的に跳ね上がりました。実は、日本の小麦の輸入先はロシアやウクライナではなく、アメリカ、カナダ、オーストラリアなのですが、他国で小麦の需給が逼迫すると、全世界的に値段も上がります。また同時に、地球温暖化の影響で近年アメリカやカナダで干ばつが続き、小麦の出来が悪くなっている。国際情勢や地球温暖化の影響で小麦



ジャーナリスト
いけがみ あきら
池上 彰 (聞き手)

1950年、長野県生まれ。ジャーナリスト。名城大学教授。慶應義塾大学卒業後、73年、NHK入局。報道記者として勤務。94年から11年間、「週刊こどもニュース」で子どもたちにわかりやすくニュースを解説。2005年、NHKを退局。『池上彰の君と考える戦争のない未来』（理論社）、『池上彰の社会科教室』（帝国書院）など著書多数。本誌の対談を集録した『池上彰が聞いてみた「育てる人」からもらった6つのヒント』（帝国書院）も好評発売中。最近、アメリカ合衆国大統領選挙を現地取材。

の値段が上がるとパンやお菓子の値段も上がるんだよ、と。

サヘル そうやっていてねいに身近なパンやお菓子につなげていただけると、わかりやすいですね。

学校が子どもの最後の砦になることも

池上 サヘルさんは8歳で日本に来たのですよね。

サヘル 私はイランの小さな町で生まれ、イラン・イラク戦争停戦直後の空爆で4歳のとき孤児になり、7歳まで孤児院で育ちました。そして義母と養子縁組をして8歳のときに日本に来たのですが、日本語も全くわからない状態でした。大変なこともとてもたくさんありましたが、あの当時、子どもにとっての学校は、今よりも自由で恵まれた状況だったのか

もしれないと思うことがあります。

例えば、自分の人生について講演するために学校に呼ばれることが多いのですが、外国にルーツのある子どもたちが昔よりもずいぶん増えているのに、どんな国籍の子がいるのかを先生にたずねても、はっきりとはわかりません。さまざまな配慮から一律に国籍を把握するようなことはしていないそうです。

池上 それは残念ですね。その子にどんな国なのか話してもらったり、みんなでその国について勉強したりすると世界はもっと身近になりますよね。

サヘル そうなのです。それに、日本人であっても外国籍であっても、私自身が子どものころにそうであったように、経済的に厳しい家庭の子、家族から暴力を受けている子、居場所のない子にとって、学

校は身を守るためのシェルターでもあり、給食が唯一の栄養源になることもあります。学校の先生が、家庭では解決できない事情を抱える子どもたちの最後の砦になることもあります。SOSを出せる相手になれたはずが、今はモンスターペアレンツという言葉が世の中に根付いてしまい、いろいろなことを気にしすぎて、大切なことがどんどん共有されなくなっています。きっと教育者の方もこの世界のさまざまな制約に苦しんでいるのではないのでしょうか。社会は今、分断が進んでいます。世界が目指すSDGsからも逆行しているように見えます。

池上 サヘルさんが日本に来たころは、学校はどのような状況だったのですか。

サヘル 小学校の先生方は、私にたくさんの手を差し伸べてくれました。国に帰るか日本に居続けるかもわからないのに、今必要なことは誰かが親身向き合うことだと、校長先生が日本語をいねいに教えてくださいましたし、給食のおばちゃんが、お母さんと私を救ってくれました。住む場所がなくなり路上生活をせざるを得なかった時期に、仕事と住む家を探して助けてくださったんです。

池上 中学生のころは、クラスメートにいじめられていたときも先生が助けてくれなかったとご著書にありました。それは本当につらかったでしょう。

サヘル とてもつらかった。たまたま入った中学校は、小学校とは全く違いました。学校からのお便りのプリントは今のよう配慮されておらず、日本語が全く読めなかったお母さんのために、私が必死に読んで伝えていました。いじめられていることもお母さんに言えなくなってしまう。先生たちもいじめられていることについて、「あれは冗談だから」



犯罪に手を染めてしまった外国人の 歴史的背景を見る必要があります

「気にしすぎ」「がんばれ」と言うだけでした。

でも、人それぞれ、「心の皮膚」の敏感さが違うと思うのです。たぶん私は、心そのものが敏感肌だった。「普通なら大丈夫」と先生が思っても、生徒が40人いれば、40通りの「普通」が存在します。親の悪口を言われたり、外国籍であることを馬鹿にされたりしたらうれしくない。子どもたちを守るのには、近くにいる大人です。でも、中学校では、その大人が関わろうとしてくれませんでした。

教科書にない教員の経験や思いも伝えてほしい

池上 バブルの時代には、大勢のイランの人たちが日本に来て建設現場などで働いていました。しかし休みの日に代々木公園や上野公園に大勢のイランの人が集まっていると、祖国の情報交換をしているだけなのに、なんとなく怖さを感じていた日本人が少なくなかったと思います。

サヘル 最近も、窃盗などで外国から来た人たちが関わっていたことがニュースになると、「移民を入れると犯罪が増える」と言われますね。出稼ぎで来

ている人たちの働く場所がなくなり、騙されて――

本人の問題もあり、正当化はしませんが――彼らが犯罪に手を染めてしまったその背景を見る必要があると思います。すべてのできごとは、歴史的背景と関連しています。紛争や戦争、イランなら革命やイラン・イラク戦争、そして、アメリカがその背景でどういう動きをしていたか。経済制裁で国家にダメージを与えているつもりが国民を苦しめている。苦しめられた国民が犯罪者になっていくということも起こります。いろいろなできごとが全部つながっていると感じる必要があります。

池上 さらに言うと、当時、日本とイランが観光ビザ免除協定を結んでいたの、イラン・イラク戦争が終わり戦場から戻ってきて、仕事がない大勢の人たちが日本に来て日本経済を支えました。圧倒的多数は本当によい人だった。どこの国だって圧倒的多数はよい人で、罪を犯す人はごく少数です。

私は、これまで2回イランに行きましたが、日本から来たというだけで、ワッと周りに集まってくる笑顔で質問攻めにありました。『おしん』を知っているか』から始まって(笑)、「カワサキ」「ヨコハマ」、そしてなぜか「イサワ(石和)」という山梨県の地名が出てくる。きっと石和温泉で働いていたのでしょう。つまりあのときに日本に出稼ぎに来て、イランに戻って、そのお金を元手に成功した人たちがたくさんいる。ものすごく親日ですよ。

サヘル 日本とイランの友好関係は1929年以来続いています(42〜53年は外交関係断絶)。でも、今お話しくださったようなことは学校の教科書には載っていません。歴史の教科書にはメソポタミア文明やゾロアスター教などの言葉が少し出てくる程度で、あとはイラン・イスラーム革命、イラン・イラク戦争と1ページにも満たない内容です。現在のイランの情勢なども全く知ることはできません。

池上 それこそ私がもし学校の先生で、生徒が「イランから来ました」と言ったら、「ちよつと地図を広げてみよう!」と始めたいですね。「イランとイラクを間違える人がいるけど、イラクはアラブ人で、イランはほら、ペルシャだよ」という話もしたい。大学でも、「イランでは、ペルシャ語は実はアラビア文字で書かれている」と話すと学生は意外な顔をします。そこで、「日本語の漢字は中国の文字を



来日後、10歳のころ。ランドセルを手に。



使っている。よその国でつくられた文字を使うことはあるんだよ」と伝えると納得してくれます。

サヘル 素敵ですね。池上さんのお話からは、池上さんご自身の好奇心が伝わってきます。学校では教科書での一定の学びも必要ですが、私がいつも先生たちに期待し、お願いしているのは、「子どもたちが世の中に出て目の前に当事者が現れたとき、どうその当事者をとらえられるか」を学ぶ機会を提供してほしいということです。自分の興味がないことは自分の選択で遮断できる時代になりました。SNSでは友だちだって消去することができます。でも唯一、学校で学ぶ時間だけは、大人たちから何かを伝えることができる貴重な機会です。社会で起きている現実や教科書ではわからないこと、先生たちの身の回りで起きていることを熱を持って伝えられる場です。

ただ教科書に載っていることを伝えるだけなら、ロボットでもAIでもできます。先生も失敗して、傷ついて、いじめられたことがあるかもしれない。今の仕事で大変なこともあるはず。先生だから立派である必要はないと思います。人生の先生として失敗もたくさん聞かせてもらえることが、子どもたちにとっての教訓になるのだと思います。

自分を好きになると世界にも目を向けられる

サヘル 実は私、中学生のころにテレビで見た池上さんが忘れられないんです。池上さんのお話は面白いなと思っていました。

池上 ワハハハ（笑）。

サヘル 当時、いじめられていた時期でもあり、いろんなことがわからなくなっていたけど、池上さんのテレビを見たり本を読んだりすると、すごく好奇心を持って話をしてくれているとわかる。どこかに載っている言葉をそのまま読み上げているんじゃないかと、ご自身のなかから出てくる言葉を伝えてくださってるんだなって。

池上 先生自身も自信や経験がないと、教科書や指導書を棒読みするようなこともあるかもしれませんがね。実体験や熱い思いがないと、やっぱり聞く人には響かないんだろうと思います。

サヘル 高校生のとき、モッチとあだ名で呼んでいた私の先生も、まさに池上さんのような先生でした。いつも自分の実体験をもとに語ってくれて、定時制高校だったのに大学に行けるようにヘルプをしてくれました。私は、入学当初は成績が悪かったけれど、そうして誰かひとりでも信じてくれる先生がいて、「あなたにできること、武器を1個でもつくろう」

と言って信じてくれたことが大きな励みになり、勉強もがんばることができました。自分では可能性があるんだと思えるようになった。

子どもは自分に自信を持てば、自分のことを好きになることができます。そのゆとりが生まれた瞬間に、社会に対しても世界に対しても目を向けられるようになると思うんです。自分を否定されてしまっただけで自分に自信がない子は、社会に目を向けることは難しい。そういうこともできる場所が学校であり、先生なんだと思います。

池上 先生たちも今、非常に忙しく、大変な状況だと言われていますね。

サヘル 私がとても胸がつまるのは、希望を持って先生になった若い人たちが、先輩の先生たちが疲れ切っているのを見ることがです。先生たちの人手が足りていないなかで必死に働いている。先生たちが「どうしても先生になったんだろう。守りたい子どもを守れない」と疲弊してしまうのは本当につらい。だからこそ私は今、先生たちもがんばりすぎないでほしいと思います。なぜ先生になりたかったのかを忘れないでほしい。

この対談を読む方は、ベテランの先生が多いと聞いています。そうしたベテランの先生方は若い先生たちがどうすれば自信を持って、生き生きとのびのびと子どもたちと関われるのか、何が問題なのかを考え、改善してほしい。現場にいる苦しみを知って

信じてくれる先生がいたから

勉強もがんばることができました

私が自分を探し続けることは

今ここにいる自分を否定すること

いるからこそ守れることがある。守ってくれる先輩方の大きな背中を見れば、新人の先生がその背中に応えてくれるはずです。そんなよい連鎖が生まれることを願っています。

児童養護施設の子どもたちを忘れないで

サヘル 私から先生方へお伝えしたいこととして、もう一つ大事なことがあります。学校には児童養護施設から通っている子どもたちがいます。学校の先生は、高学年になるにつれ、自分が思っていた当たり前が当たり前ではないことに気づきはじめます。友だちの家に行くといういろいろなことがわかってしまう。保護者が来る行事で複雑な思いを抱えている子どももいます。

今の日本では、児童養護施設にいる子どもたちの7割以上が実親などから虐待された経験があるといわれています。数字の変動はありますが、この数年でも、要保護児童数は4万人を切っていません。

池上 私もグループホームを見に行ったことがあります。そこでは10人ぐらいの子どもたちが数人の職員の方と暮らしていました。

サヘル 児童養護施設でもグループホームでも、感情表現がうまくできない子は置き去りになってしまっていることがあります。子どもたちのなかには、親に恵まれない子や、愛を知らずに貧困にさらされ、飢えて心が枯れてしまう子もいます。そんなとき、学校で

自分を待っていてくれる先生の存在はとても大きい。先生がその子にとってすごく大事な居場所になることもあるとお伝えしたいのです。

池上 児童養護施設は、18歳になると出なければならぬことが多く、高卒で就職するとなると、児童養護施設にいたというだけで就職がとて難しくなると聞いたことがあります。ところが、大学に進学して「大学生でひとり暮らしでした」と言うと、過去が全部消えて就職の差別というのがかなりなくなるんですね。児童養護施設の子どもたちも大学に行きたい子は進学できるように支援する必要があります。児童養護施設にいるのに大学に行くのはぜいたくだと考える人もいるかもしれませんが、全くそんなことはありません。

サヘル 本当にその通りです。仕事に就けるかどうかで、人生が大きく変わることもあります。就職できても、叱られると自分を否定されたと思ってしまう。辞めてしまう子どももいますが、そこに至るまでの背景を見てほしい。私も7歳まで施設で暮らしていましたが、安易に「どうせ施設の出身は」と言われることがよくありました。私自身も、誰も私のことなんて見てくれないという経験をしてきましたが、彼らにはそのような失われた時間がある。どんな生い立ちであれ、みんな生きる権利を持っています。

また、そういう現実を知らない子どもたちには、社会でどんなことが起きているかを伝えてあげてほ

しい。そういう現実があることを知っていれば、友だちから「実は施設に入っているんだ」と告白されたときにも、「そうなんだね」と否定せずに受け止められるはずです。知らなければ、中学生の私がされたように、「何それ？ ありえない」と否定されることもある。知ることですいぶん変わるはずです。

自分の痛みを誰かに伝えることは意義がある

池上 サヘルさんは今こうして自分の過去を振り返りながら問題点を提起してくださっていますが、そのような話ができるようになったのは、何かきっかけがあったのでしょうか。

サヘル たぶん大きなきっかけがあったというよりも、徐々にだと思えます。自分のことは語れず、自分探しをしていた時期もありましたが、途中からそれは意味がないと思うようになりました。

池上 どうしてそのように思ったのですか。

サヘル 自分はここにいるのに、私がずっと自分を探し続けたら、ずっと今ここにいる自分を否定していることになる。自分はもうここにいないのだから、その自分を肯定して、自分の経験を埋めていく作業をしようと思ったんです。傷つかないほうがいいけれど、自分の傷は癒えることはありません。ついってしまった傷の痛みほど、人とわかち合えるんだということにも気がきました。

池上 傷の痛みをわかち合う経験をされたんですね。

サヘル はい。いろいろな国に行かせてもらいましたが、イラクに行ったときにそのことを強く感じました。イラン・イラク戦争停戦直後に私はイランで孤児になったのですが、イラクに行ってみると、国や人種は関係なく、私も彼らも、お互いに戦争の被



2024年2月、特定非営利活動法人 難民を助ける会（AAR Japan）の活動に参加し、ウガンダの難民居住地でコンゴの内乱を逃れた子どもたちと交流した。

学校は可能性がたくさんある場所 子どもたちは未来を担っている

害者だったのです。実際に会って話をすることで、戦争で負った心の傷は同じだということがわかり、その傷の痛みをわかち合うことができました。同じ痛みを抱えている人が世の中にこんなにたくさんいるんだと知りました。アメリカにも傷ついている人は

大勢いて、どんなに富があっても満たされていない人がいる。だからこそ、自分の痛みを誰かに伝える意義がある。痛みを乗り越えた私にできるのは、これを伝えることしかありません。

私は人を守ることはできない。痛みを取り去ることはできない。でも、ひとりじゃないんだと伝えることはできる。私は自分の人生を語ることで、私自身のメンタルケアをしてきたんだと思います。

そして、お芝居を通して自己表現をすることでもどんどん自分の経験を言葉にすることができるようになりました。自分の心のなかにあるものを芝居で表現する、文章にする、写真に収める。そうしていくうちに、自分が存在しているんだ、自分は何かを伝えるために生き延びたんだということに少しずつ気づけた。それが20代後半だったと思います。

子どもたちに「平和」の授業を

池上 最後になりますが、『階』を読んでいる皆さま

んに伝えたいことはあります。

サヘル 学校の教育に「平和」の授業をつくってほしいという強い思いがあります。戦争を終わらせ、世界に平和が訪れることはとても難しい。でも週に1時間だけでも、必ずその時間は世の中で起きていることにみんな目をつけて、「平和ってなんだろう」と考える時間を持つてほしいんです。それは日本のことでもいいし、自分たちの身近なことでもいいと思います。そうやって、平和の種まきができる授業があればと思います。

池上 広島と長崎では平和の授業をしていますね。

例えば、広島市の学校の多くは8月6日が全校登校日で、夏休みですが、学校で原爆のことを学びます。広島を卒業した子が東京に引っ越して来ると、「登校日もなく、8月6日が何の日か知らない人たちがいっぱいいてショックを受けた」と言います。国語や社会科、総合的な学習の時間に平和学習の時間を設けたり、戦争体験者の話を聞いたりすることなどありますが、十分ではないかもしれませんね。**サヘル** そういう違和感を持った広島の子どもたちが大人になったとき、「意識高い系」などと言われるて傷ついてしまうこともあります。ほんの少し意識をするだけで、生き方は本当に変わるはずなんです。これからの未来は、特に「平和」について学校のなかで意識して伝えていく必要があると思うのです。

平和についてだけでなく、家庭でも学校でも、選



対談を振り返って

挙や政治の話はしないことが多いのではないでしょう。その結果、若い世代の投票率が上がらず、日本の衰退にもつながっていく。生きる権利、人権、選挙権について、しっかりと学校で子どもたちに伝えてほしいと思います。

未来を担う子どもたちにどう教育をするかによって日本や世界が変わると思います。学校は、本当に可能性がたくさんある場所ですね。

対談編集／太田美由紀

サヘル・ローズは本名ではありません。空爆で孤児になってしまった結果、本当の名前を知っている人がみんな亡くなってしまったからです。でも、彼女を見出し、日本まで連れてきてくれたイランの女性が義母となって、彼女を育ててくれました。サヘルさんの自叙伝を読むと、その壮絶さに言葉を失います。にもかかわらず言うべきだからこそ言うべきか。いまのサヘルさんの言葉には説得力があります。頑張っ生きていこうと思わせてくれます。素敵な笑顔が私たちを奮い立たせてくれるのです。

育つ環境をつくり、 古の技と心を伝える



株式会社 鰯工舎 総棟梁
おがわ みつ お
小川 三夫

1947年、栃木県生まれ。高校卒業後、仏壇職人などを経て、法隆寺・西岡常一棟梁の内弟子となる。法輪寺三重塔、薬師寺金堂再建などに副棟梁として携わる。77年に鰯工舎を設立、弟子を育てながら多くの寺社建築を手掛ける。2003年、「現代の名工」に選ばれる。07年に引退した後は、後進の育成に力を注ぐ。著書に『不揃いの木を組む』、『棟梁』など。

共同生活で修業すること

宮大工の棟梁として独立した1977年に鰯工舎という寺社建設会社を立ち上げました。以来、育つていった弟子たちは120人くらいでしょうかな。今は代表を退き「総棟梁」の立場で後進の指導などにあたっています。鰯工舎にはここ（栃木県塩谷町）のほか奈良と九州にも拠点があり、全国から弟子を受け入れており、今は約20人が働いています。

弟子たちは、私を含めた全員が寝食をともにする共同生活を通して仕事を覚えます。木の一本一本が不揃いなと同じで、彼らもみんな違う。一緒に暮らしながら仕事をすると、互いが互いを深くわかりあうことができる。そうすると現場の雰囲気、あれ、何かあつ

たな、など不思議に伝わってくるのです。

朝は5時半に起きて朝食の支度。これは入社したばかりの若手の担当です。全員分、三食つくる。買い物も、翌日の下ごしらえもする。夕食が終わったならみな、自分で使う鉋の刃を研ぐなど、道具の手入れも自主的に行っています。大変じゃないかと言う人もいますが、職人になりたい気持ちがあれば当たり前。入ったばかりで大工の仕事はできないけれど、給料は払われるのだから、みんな少しでも早く仕事を覚えようと、一生懸命です。

このあいだ、弟子入りを希望する高校生が来たのですが、学校からこちらには「求人票を出して、職安を通してくれ」と言われる。その子のやりたいようにやらせたいの、と思う。子どもたちの身になって考えている先生も、もちろんいます。働きはじめてからしばらくして、そつと教え子の様子を見に来て黙って帰っていった先生もいました。

今の社会は、自分がよければいい、自分の仕事や役割はここまで、という考え方が目立ちます。昔、先生方を対象とした泊まりがけの研修で講演したことも何度かある。共同生活しながら研修し、そこでお互いにいろいろなことを話し合っている先生たちの、生き生きした表情をよく覚えています。まるで子どもに戻ったみたいなきぶんだったんじゃないかな。そんな経験をした、子どもの気持ちに寄り添える先生が、もっと増えたらと思っています。

育てるのではなく、育つ環境をつくる

私が宮大工を志したきっかけは、修学旅行で訪れた奈良で見た法隆寺でした。これはすごいと思った。きらきら輝いて見えました。今のような道具もないのに、どうやってあのように巨木を運び、建物を組み上げられたのだろう？ 先生から、「お前らは馬鹿だ、ちゃんと将来を考えろ」などと言われてばかりだったこともあり、「ああ、これを職業にしよう！」と思ったのです。

高校卒業後すぐ、法隆寺の西岡常一棟梁に直接弟子入りを願い出ましたが、当時の宮大工は仕事がなく、「この仕事では食っていけないから」と断られました。それでも諦めきれずに長野県の仏壇屋で修行したり、島根県の日御碕神社で図面を描く仕事をしたりしながら、ようやく21歳のとき、西岡棟梁のもとで働くことを許されました。

西岡棟梁のもとで働きながら仕事を学んだといっても、直接指導を受けたのは一度だけあるとき、鉋を引いて見せてくれて、鉋屑とはこういうものだと言われました。その薄くてみごとな鉋屑を、私は窓ガラスに貼りつけました。そして同じようにできるよう、刃物を研いでは削り、を繰り返して練習したのです。だから私も弟子たちも、新人に手取り足取り教えることはありません。本人が気づき、やりたいと思うことが大事。それが自分で学びたいという気持ちにつながる。育てるので



総棟梁の厳しくも温かいまなざしに見守られながら、黙々と仕事に取り組む若い弟子たち（鵜工舎栃木本社にて）。

はなく、育つ環境をつくることが重要です。

知恵があるから、挑む力になる

木にはそれぞれに癖があります。大工は年輪を見てこれは右に曲がりそうだ、などとその癖を読みながら組んでいく。一番よいのは、木を静かに置いておくこと。長く置いておけば癖が自然に出る。でも、今はそのための時間がないから、昔よりむずかしいですね。

人も木と同じく不揃いで癖がありますが、それを他人が直すことはできない。自分の悪い癖に気づき、自分から素直に直そうと思うようでなければ意味がない。それにもやはり時間がかかる。でも、今の学校や会社を見ると、忙しくて余裕がない。素直さを殺してしまうような教育に見えます。

学校は知識を教えますが、職人が学ぶのは知識ではありません。法隆寺をつくるるとき、人々はそのをつくる知識をもっていなかったでしょう。その場で頭を使い、なんとか山から巨木を切り出して運び、それを組み上げました。そういう「知恵」があったから、完成させることができたと思うのです。

木の運び方や組み方も、やがて知識となり伝わりますが、知識だけでは、決して法隆寺を超えるものではない。それに対

して知恵は限りなく湧いてくるものだから、こんどはまた東大寺大仏殿のような大きな建物をつくるができる。そうやって新しいものに挑む力が大切だと思っています。私たち職人が学ばなければならないのは、まさにこのような知恵なのです。

ほっとけ、ほっとけ、仏の心

西岡棟梁のところに弟子入りして5年もたないころ、法輪寺（奈良県）三重塔の再建工事で副棟梁（棟梁代理）を任せられました。今の能力より少し上の仕事を任せて伸ばす、という西岡棟梁のやり方です。今の鵜工舎も同じです。任せたら、弟子のやり方にあれこれと口を挟まない。指導を始めると、やり方が違う、間違ったなどと怒ることになってしまふ。弟子たちも指示待ちになったり、指導されたやり方以外はできなくなったりするでしょう。もちろん任せるためには、しっかりと上に立つ者が責任を負う必要があります。

棟梁というのは、まさにその責任を負うということなんです。大工だけでなく左官や瓦職人なども束ね、現場のすべてを決断しなければならぬ。リーダーにもいろいろあるだろうけれど、やはり「あの人のようになりたい」と思われる、自然と上に担がれるような人間でなくちゃダメです。そのためにも、やはり面と向かって教えるのではなく、背中教えるようなやり方ではないといけない。「教える」は入口でしかない。もっと深く入るためには

「教えない」ことが大切。最後はほうっておくんだ。ほうっておくと、向こうから一生懸命になって追いかけてきたりするでしょう？「ほっとけ、ほっとけ、仏の心」。これは以前、私がつくった言葉です。ほったらかしとは違うので、ほうっておくほうが意外に大変だったりするのです。

古い建物から感じるのは美しさだけではない

26歳でいきなり副棟梁を任せられても、毎日の仕事はやり甲斐があり、何よりも楽しかった。ここまで仕事を続けてこられたのも、知恵を働かせて新しいものをつくる仕事が好きだったからです。そして経験を積んだ今、法隆寺や薬師寺などの古い建物を見ると、千年以上も前の人々がどんな道具を使い、どんな工夫をしながらその建物をつくったのか、まるで目に見えるようにわかる。鵜工舎も、そこまで感じ取れる職人が育つ場であってほしいと思っています。

子どもたちは大工じゃないから、それはわからなくていい。奈良の古いお寺を見ても、べつに美しいなあと思わなくてもいい。「これは〇〇様式」などと知らなくてもいい。でも今のようない道具がなかった時代、木を運んで建物をつくるのがどれほど大変だったか、それをつくった人はすごい！と感じ取れるような人が増えてほしい。そのためには、知識ではなく、自分の意志で何かに挑んでみるこ



サツマイモの収穫
大きく育ったサツマイモはどれかな？

ここに教育あり

ふるさとの農業を 実践から学ぶ ～小学校農業科の取組～

福島県喜多方市教育委員会
学校教育課 課長補佐・指導主事
なかの よしまさ
中野 富全



喜多方市の小学校農業科

本市は、福島県の北西部、会津盆地の北部に位置し、平成18年1月4日に5市町村が合併した市です。産業は、稲作を基幹作物とする農業が中心ですが、雄大な自然、蔵や文化財、ラーメンやソバなどの観光産業や良質な水と米をもとにした酒造業、桐材加工や漆器製造など伝統的な産業もあります。

本市の特色ある教育に小学校農業科（以下、「農業科」）があります。この農業科は平成19年度から取り組んでいて、本市の全小学校17校が1年間を通して農業体験を行っています。授業時間は年間30時間程度、総合的な学習の時間を活用して行っています。本市の基幹産業である農業の体験を通して、「豊かな心の育成」（「いただきます」「や」「もったいない」などの言葉の意味について考え、感謝の気持ちや慈しみの心を育てる）、「社会性の育成」（数ヶ月にわたる農作物栽培を通して、児童に責任感をもつことや努力することの必要性を気づかせ、社会性の育成を図る）、「主体性の育成」（目標を設定し計画を立てて取り組むことで、

主体的な学習意欲や取り組む態度を育てる）を行っています。

各学校では農業を教えてくれる農業科支援員（以下、「支援員」）を毎年募り、授業を教員とともに行っています。支援員は地元農家の方々だけでなく、児童の家族や学校運営協議会のメンバー、地元公民館の学習ボランティアなど様々な人がいます。今年度（令和6年度）は市内の全小学校17校で合計104名の支援員の協力を得て授業を行っています。各小学校に1～15名の支援員が、農業のことを児童に教えています。また、学校では農業科担当教員を決め、支援員との連絡や日程調整などを行っています。農業科の活動は天候に左右されることが多いため、担当は行事や日程調整がしやすい教務主任や学年主任が務めることが多いため、学校によつては若手の教員が務めることもあります。

本取組以前の平成18年頃の学校では、児童生徒の規範意識や社会性の希薄化、不登校の増加、自律心や学ぶ意欲の低下、生活習慣の乱れなど、21世紀を担う児童生徒を取り巻く問題が深刻化し、社会全体に大きな影響を落としています。

した。そのため、学校現場においては「豊かな心の育成」「個に応じた教育」「授業の質的改善」等に取り組む、一定の成果は上げていたものの、根本的な解決には至っていない状況が続いていました。そこで農業科に取り組む、「なすこと」によって学ぶ「精神」に基づき、農作業の実体験活動を重視した教育を展開して、今年度で18年目を終えようとしています。

農業科の取組

農業科では、農作物の栽培だけではなく、農業と環境とのかかわりや農業と人間とのつながり、「生命」などについて学びながら、地域の基幹産業である農業の本質を子どもたちにより深く知ってほしいと考えています。また、将来児童が就農することも考え、農業の用語、肥料、技術的なことや受け継がれてきた知恵など、専門的な内容も幅広く学んでいます。

まず春に行うことは、支援員との打ち合わせや支援員と児童の顔合わせ会を行っています。ここで農業科の今年度の取組を児童や支援員と共有しています。また、農業科で育てる作物を決め、田畑の活

写真（上）：田植えの風景 昔ながらの手作業で田植えを行っています。写真（下）：稲刈りの風景 手刈りした稲を藁で結び、これから天日干しをします。 写真：福島県喜多方市教育委員会提供（3点とも）



動を行っています。農業科に取り組むのは全児童、3年生からなど、学校の方針により様々です。春には一大イベントの「田植え」を行います。昔ながらの手作業で苗を手で植えていきます。学年の人数が多い学校では5年生だけが田植えを行う学校もありますが、小規模校が多いため、ほとんどの学校で全校体制により田植えを行っています。上級生が下級生に田植えの手本を見せ、異学年が共同で活動できる場にもなっています。

夏にはトマトや枝豆、トウモロコシなど夏野菜の収穫を迎えます。

その収穫を迎えるまでに行っているのが水の管理と除草です。これらの作業は手間がかかり、嫌がる児童も多くいます。水の管理は水

農業の大変さ

「今年のねぎはどうやって食べようかな。」

と、今年も収穫する日をとても楽しみに待っていました。

私たちは今年も長ねぎを育てました。去年の長ねぎは、とてもよく育ち、野菜が苦手な私でもおいしく食べることができました。だから、収穫が近づくにつれてとても楽しみでした。しかし、夏休みが終わったある日、先生から、「長ねぎが今年の暑さでだめになった。」と聞いて、食べることを楽しみにしていた私はとてもショックを受けました。みんなも、「暑かったから、しょうがないよね。」と言ってすぐにあきらめていました。私も、今年の暑さはすごかったから仕方ないかと思っていました。

でも、家族とスーパーに買い物に行ったとき、野菜コーナーにはよく育った長ねぎが並んでいるのを見て、ある疑問が浮かんできました。同じような気候で育てても、なぜスーパーには長ねぎがあるんだろう？

そこで、私は自分たちの育て方を振り返ってみました。すると、とても暑い中、草むしりや水やりはほとんど先生たちにまかせ、農業科の活動でも、「面倒くさい」と思いながら草むしりをしていた自分が思い浮かびました。こんな態度で長ねぎを食べることだけを楽しみにしていた自分にだんだん腹が立ってきました。また、去年まではそんな態度でも気候に恵まれていたため、収穫ができて農業は簡単だと思っていたことも恥ずかしくなりました。

作物を育てるために、様々な工夫をして、とても大変なことでも面倒くさながらに続けるということは簡単にはできません。今年、長ねぎの栽培に失敗したことで、食べ物一つを作るにも、農家の方々の知恵と苦労がかかっていることを実感することができました。今年の農業科の学習は、農業の大変さに気付く機会となりました。

コンクール出品された6年生（当時）の作文

農業科に、興味をもつてくだった個人や団体が視察にお越しただいているところです。様々な質問や意見を賜り、農業のもっている教育的効果を再認識して、農業科の今後の方向性も検討しているところです。今後はキャリア教育としての取組も少しずつ取り入れていきたいと思っています。もしご興味がありましたら、視察にお越しただければと思います。

道や川が畑の近くにある学校は容易ですが、そのような環境がない学校は畑まで水を運んで管理を行っています。また除草は頻繁に行わないと栄養が野菜にいかず、美味しい野菜が収穫できません。これらの作業の際は積極的でない児童が見られますが、育てた野菜を収穫したときにその作業の大切さを児童は感じるようになります。これも児童の成長する場面のひとつです。秋は「実りの秋」の名の通り米やニンジン、サツマイモなどの野

菜の収穫を迎えます。「稲刈り」は「田植え」同様に手作業で稲を刈りますが、鎌を使うので注意が必要となります。支援員をはじめ教員、学校によっては上級生が安全に作業するために注意をしながら時間をかけて丁寧に作業をしていきます。刈り終えた稲穂は昔ながらの天日干しや脱穀を行い、「米」となります。その米は収穫祭で食べたり、各家庭に配付されたりして、実りの秋を体験することができます。

冬には1年間の取組をまとめます。全国の市町村の学校で1年間かけて農業の体験を行っているのは、本市と北海道美瑛市の学校ということで、全国でもあまり例のないことです。農業科で学んだことを作文にしたため、市教育委員会の作文コンクールに出品します。児童が感じたことや新たに学んだことを原稿用紙2枚にまとめるのですが、児童それぞれの成長がわかるものがほとんどです。その内容を紹介します（カコミ参照）。

今後の取組

全国の市町村の学校で1年間か

けて農業の体験を行っているのは、本市と北海道美瑛市の学校という

ことで、全国でもあまり例のない

農業科に、興味をもつ

てくだった個人や団

体が視察にお越しただ

いているところです。

様々な質問や意見を賜

り、農業のもっている

教育的効果を再認識し

て、農業科の今後の方

向性も検討している

ところです。今後はキ

ャリア教育としての取

組も少しずつ取り入れ

ていきたいと思いま

す。もしご興味があり

ましたら、視察にお

越しただければと思

▼芸術士とは

私たちは、2009年に四国・香川県高松市に協働提案して芸術士[®]派遣事業を始めました。これは、北イタリアのレッジョ・エミリア市発祥の幼児教育法レッジョ・エミリア・アプローチのアトリエリスタ（芸術専門家）をお手本にして、アーティストを保育幼児教育のサポーターとして芸術士と呼称し、派遣する事業です。芸術士は、造形作家、デザイナー、ダンサー、音楽家、舞台俳優などさまざまなジャンルの出身者です。保育士、幼稚園教諭と協働し、音楽や造形を教えるのではなく、第三者の視点で触媒となつて、遊び尽くす中に子どもたちの個性の芽を育む役割を担います。

当初、高松市とこの事業の目的を定めるにあたり、子どもたちの自己肯定感を醸成する役目と置き、その手助けを芸術士がしましょうと話し合いました。活動を重ねるに従い、非認知能力を育むなど、保育の質に向上がみられると評価されるようになりました。

活動にあたっては、「芸術士が実践する4つの約束」を定めています（表参照）。本来子ども

社会と教育の架け橋 芸術と教育

アートが奏でる創造の余白 ～芸術士の活動から～

特定非営利活動法人
アーキペラゴ

代表理事 三井 文博

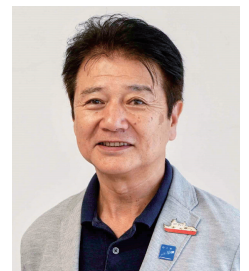


表 芸術士が実践する4つの約束

1	専門性を活かして、子どもの表現をサポート 想像力、創造力を育む：芸術士は、子どもたちの世界を共に楽しみ、アートの専門性を活かして、子どもたちの想像力と創造力を最大限に引き出すサポートをします。
2	なぜ・どうしての気持ちを大切に 探究心は大切な「タネ」：芸術士は、それらの好奇心に対して、すぐに答えを出すのではなく、可能な限り子ども自身が答えを探し求められる環境を作ります。子どもたちが自ら答えのヒントを見つけ出す過程を大切にしています。
3	結果を求めない 過程を大切にしています：芸術士活動は、アート作品を作ることが目的ではありません。子どもの心を尊重し、活動の型を決めず、一人ひとりの気づきや発想に共感することを大切にしています。
4	子どもの可能性を社会に伝える 活動の記録「ドキュメンテーション」を作成します：ドキュメンテーションは、芸術士の視点で拾い集めた子どもたちの言葉や発想を、写真とともに記録したものです。子どもたちの独自の心や個性の芽を発見する手がかりになるでしょう。

アーキペラゴは、多島海・群島（瀬戸内海のような情景）を称する英語。点在する島々のように、未来に繋ぎたい多様なプロジェクトを自律・分散・協調の下に運営する特定非営利活動法人です。芸術士派遣事業、放課後児童クラブのほか、瀬戸内の観光の企画等も手がける。

つ無限の個性と可能性を、私たち大人は教育と称してその芽を摘むことの如何に多いことか。これは、レッジョ・エミリア・アプローチの哲学ともいえる「子どもたちの100の言葉」（ローリス・マラグツツイ作）という詩で述べられていて、私たち芸術士の理念ともなっています。

活動16年目を迎えた24年、地元の香川県内の市町、県外では愛媛県四国中央市、島根県津和野町、石川県金沢市など多くの自治体でこの活動が導入され、私たちは「芸術士派遣事業」として200を超

える施設に芸術士を派遣しました。こども家庭庁に本事業の仕組みを説明する機会も得られました。

▼現場の化学反応

アーティストたる芸術士は、現場では子どもたちからちゃん付けと呼ばれ、先生ではなく、お友達として存在しています。日常に馴染みにくいグレーゾーンと呼ばれる子どもたちが、芸術士に懐いて離れなかったり、真つ先に駆け寄って来たりする姿を、普段接している施設長さんが、涙目で見守ってくれることもしばしばです。

そのような現場で印象的な活動事例として今でも語り継がれているのが、「イカとの出会い」です。

芸術士派遣が始まって3年目から市立の幼稚園からお声がかかり、現場にご挨拶に伺った時のことです。園の壁には、同じようなタケノコの絵が一面に飾られています。「なぜ、みんな同じ絵なの？」と芸術士は疑問を感じ、お手本を先生が描いてそれを真似るように指導したのではと推測しました。取り組み当日、芸術士の方は、魚屋さんでモンゴウイカを4杯買って幼稚園に行きました。子どもたちは初めて見る生のイカに、



写真（上）：直接触れて感じた生命力と子どもたちの個性があふれるイカの絵。写真（下）：校舎との別れを惜しみ、思い出を塗り重ねる（高松市立香南小学校）。写真：NPO法人 アーキペラゴ提供（2点とも）

おっかなびっくり。観て、触って、墨が出て、大騒ぎ。散々遊び尽くして、さあ、イカを描いて、と言うと、いろいろな命と個性あふれるイカたちが描かれました（写真上）。その時の担任の先生は、現在はあることも園の園長で、この時の光景を昨日のことのように覚えていました。

▼自己肯定感を育むこと

現場では、さまざまなエピソードがあります。クラスで自分の住む街を大きな絵に描いた時、自分が描くだけでなく、隣の子と相談し、描けない子を巻き込み、アドバイスしながら描き進めていた微笑ましい姿も見られました。集団での活動に参加するのが苦手な3

歳の子が、ボディ・ペインティング活動で、その時はやりたくないと思っていて見ているだけだったけれど、後日、絵の具が大好きになつて家で手にいっぱい付けて楽しんでいますとの報告を保護者からいただきました。芸術士が来る日を楽しみにしている子も多いと聞きます。日常の活動で、このような綺羅星のような事例が報告されています。あるベテランの園長先生からの報告も紹介します。

「芸術士は、子どもたち一人ひとりのよいところをばつと見つけて、言葉にして褒めてくれます。その姿を見て、そういう視点、そういう褒め方があるのかと現場で気づくことが多々ありました。子どもたちが芸術士に会えること、共に過ごすことが喜びになっています。このことは、心が解放されている状態だと思います。自分を受け止めてくれる人がいて、相手のことも、自分のことも受け入れられるようになる。芸術士の活動には、そんな魅力があります。これは、すごいことです。」

23年からは、香川県教育委員会からのオフアードで、県下の4つの支援学校で派遣が始まりました。アートで繋ぐ心のハイタッチとも

いえる瞬間が、いろいろなところで起こり、先生方にはとても喜ばれています。

また、24年の夏、高松市内のある小学校が移転するにあたり、廃校となる思い出深い校舎を最後に思い切つてキャンバスに見立てて別世界を作ろうという実験授業のお手伝いをした芸術士もいます。ほぼボランティアで4日間通い、2年生の図工の研究授業を提案し、大成功でした（写真下）。

どちらも、第三者たる芸術士が加わることで、通常の授業では思いつかないような活動が創出できる貴重な時間だったと思います。

▼今後の未来図

23年11月、一般社団法人日本芸術士協会を創立し、民間の芸術士資格の認定試験制度を進めています。24年3月には、高松市の芸術士活動の参加メンバーを中心に、52人を資格認定しました。今年は秋に対象を広げた試験を行う予定です。今後、人材を各地に輩出していきたいと考えています。

また、各自自治体が高松モデルを参照できるような事例集を兼ねた書籍を発刊し、予算整備と運営を担う法人の設立のサポートをする

のが、今後の当法人の目的の一つともなっています。

芸術士活動は現在、保育園・子ども園・幼稚園という未就学児施設を主なフィールドとして派遣していますが、前述の支援学校のほか、県内の公共施設など、子どもたちが集まる場所でも活動を展開しています。

この事業を始めた時から大きな懸念であったのが、レッジョ・エミリア市と同様に、小学校に入学した途端、芸術士との出会いが途切れてしまうことです。そこで、アーキペラゴの事務所が移転した際に放課後児童クラブを開設し、夏休みなどは芸術士がいるクラブメニューも用意しました。せめて小学校半ばまで、図工サポーターのような存在として芸術士が関われる方法・機会を模索しています。

前述の津和野町は、教育委員会に芸術士が所属し、保育園に加え、町内の小学校でも芸術士活動を行っています。空き教室をアトリエと位置付けて、画材・資材等を管理しながら、定期的に本活動への環境整備を行っている小学校もあると伺いました。芸術士の活動が、今後の図工教育の未来へのヒントにもなると確信しています。

異国日本の地に立つて

守屋留学生交流協会 奨学生の記

チベットと日本の 架け橋を目指して

公益財団法人 守屋留学生交流協会 第43回奨学生
ジャムヤン 加羊



民族衣装着用

◆略歴◆

- 1992年 中国青海省海南チベット族自治州生まれ
- 2012年 海南州第一民族高級中学 卒業
- 2013年 日本へ留学
(東京平田日本語学院)
- 2015年 聖学院大学 人文学部 入学
- 2021年 聖学院大学大学院文化総合学
研究科博士前期課程 修了
- 2022年 東京外国語大学大学院総合国際
学研究科博士後期課程 入学

多くはチベット自治区のみに住んでいると思われ
ますが、その東にある青海省、四川省、雲南省、
甘肅省の4つの省にも実際には多く居住していま
す。中国の2020年の統計※1によると、チベッ
ト自治区には約313万人、4つの省には合わせ
て約378万人、中国全体では約706万人のチ
ベット族が住んでいます。

◆チベットの伝統的生活、そして現在の課題

「世界の屋根」とも称されるチベット高原は、
平均標高4000mを超えます。この過酷な高地
に生きる人々の生活は、自然環境に大きく左右さ
れてきました。高地では主に遊牧、低地では農耕
が営まれ、その中間には農牧を組み合わせた混
合形態の生活が存在します。チベットでは、約
8800年前から野生動物を家畜化したといわれ、
遊牧が生活の基盤となってきました。1990年
代まで放牧地は共有とされ、季節ごとにヤクやヒ
ツジなどの家畜と共に遊牧生活を送り、冬にな
ると人はレンガの家に住み、家畜は常に遊牧地を移
動していました。

生活は家畜と密接に結びついており、家畜の毛
はテントや敷物、衣料品、乳は乳製品、肉や内臓
は食糧として重要です。乾燥させた家畜の糞は、

燃料として高地の
寒さをしのぐため
に欠かせません。

こうした環境の
中で、チベットで
は土着のボン教と

仏教の共存が生まれました。仏教の教えである輪
廻転生、慈悲、徳を積むこと、そして「諸法無我」
(すべてのものは無我であるという教え)は、チ
ベットの文化に深く根付いています。日常生活で
は、寺院や聖山、聖なる川へ巡礼し、調和と共存
を祈ることが重要な習慣であり、その際行われる
五体投地は、額、両ひじ、両ひざを地面に着ける
礼拝で、深い敬意と信仰を表しています。

チベットに特有な葬儀方法として知られている
ものに鳥葬があります。命を支えるために多くの
生物を犠牲にしている人間が、死後は自らの遺体
を他の生物に与えるという考えに基づいています。
ハゲワシに遺体を捧げるこの儀式は、自然との調
和と輪廻の教えを象徴しています。

自然と共に生きてきたチベットですが、今、さ
まざまな課題に直面しています。気候変動や土地
の荒廃は高原の生態系に影響を及ぼし、一部の地
域では過放牧によって放牧地の質も低下していま



※1 『中国統計年鑑2021』ほか



チベット高原でのヤクの放牧の様子。ヤクの乳量は少ないが、たんばく質を多く含む。バターやチーズに加工される。(筆者撮影)

す。また、国の政策により、移動性に富んだ暮らしは暖季と寒季の2季輪換で放牧する半定住化からしだいに定住化へと変化し、都市化も進み、伝統的な生活様式が失われつつあります。

◆チベットの教育と留学の夢◆

チベットの教育には、伝統的な寺院教育と中国政府による公式の学校教育制度^{※2}があります。寺院教育は、信者からの寄付などで運営されています。初級（6歳）から中級、上級に分かれており、教義や哲学などの学習だけでなく、言語や文化の伝承の場として重要です。僧侶は地域社会で相談役やリーダーとして活動し、地域社会の結束を促す役割も担っています。

一方、公式の学校教育では、チベット語が第一言語であり、小中高一貫して中国語以外の科目はチベット語で教えられていましたが、近年、中国語が第一言語となり、チベット語の科目以外はすべて中国語で教えられ

るように変更されました。2024年からは、民族大学のチベット語学科においても、学位論文は中国語で書くように決定されました。

私は1992年2月に、青海省の古き村・ポンゴルに生まれしました。黄河が悠々と流れ、広大な草原と山々に囲まれて起伏が多く、牧

畜、農耕、農牧複合が行われており、チベット高原の生活様式の典型的な地域といえます。私の家は牧畜業を営んでおり、幼い頃から家畜を追いかけて育ちました。8歳から公式の寄宿小学校に通い、中学校に進んだ私の視野は広がり、異文化コミュニケーションに魅了され、英語は私の世界を豊かにしてくれました。いつしか、異国に行くことが私の夢となりました。

2012年に高校を卒業したある日、放牧中にラジオを聴いていると、青海民族大学が「日本語強化コース」というプロジェクトを設け、約1年間の学習を通じて日本語能力試験N4に合格すれば留学できるという案内が、夏の風に乘って耳に飛び込んできました。すぐに応募し、その年の9月から強化コースに参加、約半年で合格し、翌年ついに留学の夢が現実のものとなったのです。

◆日本での生活と研究◆

2013年12月、日本での生活が始まりました。早く日本での生活に溶け込めるよう学校で多くの日本人学生と接し、運送業、コンビニの店員などの仕事も経験し、大学に入学した15年からは整体マッサージのアルバイトに専念し、今も続けています。長く続けてこられたのは、店長やスタッフのみなさんと温かい人間関係を築くことができたからです。特に、店長はチベット文化に深い関心を寄せ、住まいを提供してくださるなど親切にしていたので、私は日本の文化に少しずつ慣れていくことができました。

そのような中で、大学院への進学の道を模索し始めました。自らが探究したい領域を探り、自分

の得意な分野は何かと自分に問いかけ続け、幼い日々から共に歩んできた家畜と自然環境の関連性に研究対象を定めました。チベットの自然の中に住む人々が野生動物を家畜化し、生業を築いてきた背後には、長い歳月をかけて蓄積された知恵の伝承があると気づいたからです。それは、学術的には「伝統的生態学的知識(T.E.K.)」にあたるもので、博士前期・後期を通じて、異国日本の地に立ち、故郷を振り返りながら研究しています。

チベット高原では、遊牧民は長年にわたり季節に適した営地を構え、4種の家畜（ヤク、ウマ、ヒツジ、ヤギ）のバランスを意識した放牧が行われ、家畜から生まれた5大資源（肉、乳、皮、糞、毛）を生活の中で使いこなし、家畜数と牧草地との適切な関係を維持してきました。現在、高地草原に住む牧畜民と生業を変えて移住地に住む生態移民、伝統的な生態学的知識を実践する環境保護団体に焦点を当て、調査を行い、彼らを通して伝統的な生態学的知識の変容を解明し、その有効性を再評価することを目的に、博士後期の論文を仕上げていくところです。

私は、中国の公式の学校教育を受け、休暇中には地元のチベット寺院で学び、大学は博士後期課程まで日本で過ごしました。複数のシステムと価値観の下で教育を受ける機会に恵まれ、それぞれの社会に広く理解を持つことができました。日本で博士号を得た後は、研究職に就き、生態人類学研究の最前線で研究を進めながら、学術交流や共同研究に積極的に参加し、社会との協働や異文化間の相互理解の強化に貢献できる、チベットと日本の架け橋となる研究者になることが目標です。

※2 かつては子どもが寺院教育と公式の学校教育のいずれかを選べたが、近年は寺院教育を希望した場合、出家儀礼後に公式の学校教育（義務教育9年間）を経てから本格的に寺院での修行、勉学に入るかたちに変化している。

子どもと、ともに



①上級生が下級生を助け、無事に登頂した赤城山登山。お弁当を楽しみ、大沼湖畔で記念撮影が恒例。



③5年生の米作り。育苗センターでの種籾播きに始まり、肥料や水の管理、脱穀までの全てを自分たちで。



②地域の人々と共に1～6年生までの全児童が餅つきを体験。つきたての餅に大喜び。



④9年生が思いを込め、地域の食堂と共に完成させた「黒学天井」(右)。地域の方々を招待した試食交流会は、大好評。

「ふるさと黒保根学」を通して郷土を愛する心と未来を創造する力を育む

群馬県桐生市立黒保根学園

本校は、群馬県桐生市の北部に位置し、地域の中学校と小学校を統合して開校3年目となる全校児童生徒数54人の義務教育学校である。

本校の前身となる小中学校でも、総合的な学習の時間や生活科、学校行事などの時間に地域を教材として生かし、特色ある教育活動が実施されてきた。統合をきっかけに、地域理解教育「ふるさと黒保根学」として再編成し、郷土への理解を深め、愛着や誇りをもち、その思いを形にして表現、発信できる児童生徒の育成を目指す学習としてスタートした。

●豊かな自然や伝統文化を生かした特別活動

児童生徒会活動の一環で、縦割り班を編成して実施する自然体験学習である赤城山登山。農業支援隊を中心とした地域人材の協力のもと、5年生を中心に栽培したお米で1～6年生で行う餅つき。町民と学園による合同運動会で生徒が演奏し、参加者全員が一つの輪になって踊る黒保根八木節など、さまざまな活動を実施している。

●自分にできることを考え実践する総合的な学習の時間

「ふるさと黒保根学」の中核となるものは、探究的・体験的な学習である。郷土のよさや課題と

出合い、「他地域の人にも伝えたい」「何とかして伝統や産業を継承したい」などといった思いをもち、1年間の学習のゴールとしてどんなことを実行していきたいかを児童生徒自身が考え、単元を設定していく。地域の高齢者福祉、米作り、産業、魅力発見などを各学年の探究課題として学びを楽しんでいる。

●郷土黒保根の一員として、自分や地域の未来を切り開く

最終学年となる9年生は、1年間の総合的な学習の時間の学習を終えて、「黒保根の魅力を、今なら何十個も言えるくらい好きになった」「黒保根に生まれて、とてもよかった」「これからも黒保根の活性化のために活動していきたい」などと、全員が「ふるさと黒保根学」の目指す目標に到達する姿を見せた。地域の人たちの協力もあり、自分たちの思いや努力が予想以上の形となり、その喜びを地域の方々と共有できたことが、地域の一員としての自覚や誇りを育んだ。地域全体を学びの場としたこの経験を通して、黒保根に根ざしながら、より広い世界へ力強く羽ばたいていくことを期待し、今後も「ふるさと黒保根学」を継続、発展させていきたい。

階

【きざし】

2025年1月16日発行 (No.52)

発行人：佐藤 清 発行所：株式会社 帝国書院

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-29 電話03-3262-4795(代)

©Teikoku-Shoin Co.,Ltd. 2025 <https://www.teikokushoin.co.jp/>

X(旧Twitter) ID : @Teikokushoin

アンケートはWebからも
ご回答いただけます

